

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 佐々木守俊

唐・宋代の中国で作られた仏教図像が、平安時代の日本において仏像や印仏の制作にいかにか受容されたかを考察する本論文は、第1部で平安時代の仏像が中国の図像をもとに造られたことを論じ、第2部では平安時代の仏像制作に関わる人々が、印仏を作りそれを仏像の像内に納入するという行為を中国から受け入れたことを論じる。

特に第1部の第1章「神護寺五大虚空蔵菩薩坐像の図像について」、第2章「安祥寺五智如来坐像について」は、疑いなくすぐれた成果を上げている論考といえることができよう。すなわち前者は、国宝にも指定されて著名な「五大虚空蔵菩薩坐像」(神護寺)の当初の像容を復元的に想定し、五尊が具体的にどのような図像を典拠として造られたかを初めて明らかにした。同時代の密教彫刻である東寺講堂や観心寺の諸像などと同様に、新たに請来された唐本図像に基づく造像であることを証明したことで、様式のみならず図像の面からもこれらの諸像との共通性が確かめられたのである。後者は、安祥寺の造営過程を再検討する中で資財帳について説得力のある解釈を見せ、「五智如来坐像」の造立に関して妥当と思われる見解を示した。安祥寺を営んだ恵運が自ら請来した経典に基づき、独自の図像選択をして造像を実現したことを明らかにして、入唐八家のうちあまり重視されない恵運の活動の意義を証してもいる。

第2部では、仏像の中に印仏を納入する儀礼全体について、時代的にも地域的にも広く目配りをして、善無畏訳『慈氏念誦法』に説く「千仏印」が、この流行の契機となったことを論じるなど、先行研究の少ない仏教版画研究の中で、評価すべき内容を持つ。印仏そのものの様式比較も行なっているのは適切であり、描かれた羅漢が手に檀印(スタンプに相当するもの)を持つ「十六羅漢像」(大慈恩寺)という中国絵画の作例を紹介しているのは、印仏を考える上で興味深い新資料を加えるものである。

全体に、史料と図像をもとにきわめて堅実な論述がされており、破綻のない論文といえることができよう。平安時代の日本が、中国から仏教図像を受け入れる際にも選択的な受容を行っていたことを実証した点、美術史、文化交流史、仏教史にとって意義のある研究である。

ただし、本論文は、平安時代といいつつもその初期と末期の作例の検討に限定し、中期における宋代図像の受容という大いじな問題を欠いている。また、受容以前に、中国においてどのような図像、印仏が作られたかそれ自体を概観する叙述が必要であったろう。論旨の展開、造形の分析に不足の点も残す。とはいえ、本論文が重要な新知見を有し、一定の水準に達した研究であるのは明らかであり、審査委員会は、今後の課題が多いことを確認した上で、博士(文学)の学位を授与するのを適当と判断した。